

# 博物館 NEWS

## ニュース

菖蒲秋草松桜文様振袖 1領 江戸時代(18世紀) 奈良県立美術館蔵

沙綾とよばれる生地を濃いめの納戸色に染め、腰より下は三角形や台形に区切って色がわりとし、四季の草木を白上げや各種の染め色であらわしている。青色の地に菖蒲を配して、さわやかな初夏の水辺を暗示させ、さらに春の桜、秋の草花、冬

にも緑をたもつ松を取り合わせて、終わりのない四季のめぐりをことほいでいる。きっぱりとした構成のなかに、自然の情感を豊かに盛り込んだ、魅力あふれる意匠といえよう。(大橋俊雄)

企画展「藍のよそおい」より

## 災害から文化財を守る

魚島 純一

### はじめに

1995年1月17日早朝、阪神・淡路地域を襲った大地震は、まさに未曾有の被害をもたらした。早いもので、あの「阪神・淡路大震災」からすでに5年の歳月が流れた。

この震災は、建築、防災、危機管理など、さまざまな方面に多くの教訓を残した。もちろん文化財の保存に関わる分野も例外ではない。

ここでは、阪神・淡路大震災の文化財レスキュー活動に参加した経験をもとに、災害から文化財を守るためには何が必要かを考えてみたい。

### 震災と博物館

地震発生からおよそ2週間が経過した1月30日、私を含めた3名の徳島県立博物館職員が、文化財等への被害状況の調査と、神戸市立博物館の復旧のお手伝いのため神戸の地を訪れた。その際目に言ちた神戸の街は、倒れたビルや折れた電柱、でこぼこだらけの道路など、まさにテレビなどで報道されているすさまじい状況そのものであった(図1)。

神戸市立博物館は、外観を見る限りほとんど被害を受けていないかのように感じられたが、地盤の液状化現象により建物が傾き、わき水のため地



図1 地震によって倒れかけたビル  
(1997.1.30 神戸市内)



図2 横倒しとなった大型展示ケース  
(1997.1.30 神戸市立博物館)

下の講堂等は浸水したと聞かされた。完全に横倒しになった大型の移動ケースなどが見られ(図2)、地震の揺れの大きさを伺い知ることができた。それでも、収蔵庫に保管された資料の多くは木箱などに収められていたために棚から落下したものの破損を免れたとも聞いた。

博物館の職員は、必要最小限を残して、避難所の手伝いにあたっているため、博物館としての業務は完全に停止しているという。そのため、すでに救出された国宝等の一部の資料を除いて、館内の資料の本格的な片づけができるのはいつになるのかわからない状況であるという。

このように、いざというときには博物館などの公的施設は、自らの被害はもちろんのこと、行政の一員として、その後の市民生活の復旧に全力をそそぐために、文化財の保存などの本来の活動に戻れるまでにはかなりの時間を要することが明らかとなったのである。

ただ、博物館という箱の中に展示、保管されていた資料は、散逸、廃棄などの心配にさらされることはなかった。

### 何が残ったのか

阪神・淡路大震災を教訓に、文化財保存に関する学会でもさまざまな議論がおこなわれた。「なぜ立化財を残さなければならないのか?」「残すことにどんな意味があるのか?」文化財の保存に携わる人間にはごく当たり前とも思えるようなこ

とまで議論がされたのも、震災の教訓のひとつであるといえる。

そんな議論の中から、まとめられたいくつかの報告では、結果として、震災後に残った文化財はすべて指定などのように何らかの形で守られていたものか、残そうとする働きかけがなされたものばかりであることが明確となった。人命までもが危機にさらされた時、まず第一に考えるべきは人命のことであり、被災者の生活である。文化財の保存を考えることは、どうしても二の次とならざるを得ないから、当然と言えば当然のことである。

このことは何も今回の震災に限ったことではない。長い歴史の中で、現在まで伝えられた文化財は、すべて残そうと考へ、何らかの形で保護されたものなのである。

しかし、残そうとするためには、そのものの存在や価値を十分に認識する人が必要となり、それを守るために行動できる人びとの存在が不可欠となる。実際、阪神・淡路大震災の時にも、守りたいという意思はあったものの、生活そのものが優先され、やむなく姿を消すこととなった文化財も数多く存在した。

### 地域と文化財保存

3月はじめ、淡路島でおこなわれた文化財レスキューに参加する機会を得た。地元の地方史研究会のメンバーを中心としたボランティアによる、未指定文化財の救済活動であった。震災によって全半壊した建物内に取り残され、このままでは廃棄されてしまう民具や歴史資料、古文書、書籍などを救い出すことがおもな目的であった(図3、4)。

すでに震災から50日ほどがたっていたこともあり、民具や漁具など多くの未指定の文化財が廃棄、焼却されてしまったことを聞かされ、文化財の救済活動にもっと迅速さが要求されることを実感した。

そんな中でも、文化財に対する理解のある方が、



図3 震災で全壊した土蔵(左)と半壊した土蔵(右)  
(1997.3.8 淡路島西淡町)

取り壊し現場等をまわり、多くの文化財を救出し、地元の資料館に避難させていることを知った。まさに、文化財に対する理解と、それを守ろうとする意識のたまものであった。このように淡路島では、文化財に関心を持った人たちの集まりが中心となって、地域の資料館、博物館に働きかけ、さらにボランティアの協力を得て、かなりの量の文化財が救出されたのである。

この活動に参加することを通して、日頃から民間レベルでの文化財保護の意識を高めていく必要性があることを強く感じた。ひとりだけでも文化財の保護を考える人がいて、実際に行動できれば、少なからず救済できるものもあることを実感した。もっと早い時期に手足となって動ける人がいれば、さらに多くの文化財が救済できたであろうと悔やまれる。特に災害などの非常時においては、行政は被災者の生活の確保を優先せざるを得ないために、文化財の保存に地域やボランティアが果たす役割は大きいといえる。

阪神・淡路大震災における文化財レスキュー活動は、文化財の保存に携わる者の一人である私に、自然の前では人間の力のなんと弱いこと、そして目的を持った人間の力の大きなことを教えてくれた。

地震をはじめとした、災害はいつか必ず発生する。いざというときには、一人ひとりが文化財を守るう、残そうとする気持ちと、人びとのネットワークが不可欠である。そのためにも、博物館はもっと地域とのつながりを考え、文化財に対する理解を高め、文化財保護の意識を深めてもらうことに努めなければならないと感じている。

(保存科学担当)

2000年4月8日の土曜講座では、「災害と文化財保存」と題して、スライドを交えてお話しする予定です。多くの文化財に関心のある方のご参加お待ちしております。



図4 土蔵から運び出された文書等の整理作業風景  
3 (1997.3.8 淡路島西淡町)



## ブタクサハムシ、徳島県にも侵入！

ブタクサハムシ( 図 ) をご存じですか? ブタクサハムシ *Ophraella communa* LaSage, 1986 は、甲虫目、ハムシ科の一種です。もともとは北アメリカにすむ体長 4mm ほどの小さな昆虫で、日本には生息していない種でした。ところが、数年前に関東と関西でほぼ同時に発見され、ものすごいスピードで日本国中に広がるようとしています。

このハムシが日本で初めて記録されたのは 1997 年で、埼玉県朝霞市でブタクサ、オオブタクサを食害している本種が発見され、和名を「ブタクサハムシ」として報告されました。しかし、千葉市内をはじめ、東京都や神奈川県下の数力所では 1996 年にすでに発見されていました。現在では広く関東地方に分布しているようです。

幼虫や成虫は、和名の由来にもなったブタクサやオオブタクサを食べて育ちます。これらの植物は、このハムシと同様に、原産地が北アメリカで帰化植物として有名ですが、花粉症の原因の一つとしても悪名高い植物です。ほかにオナモミやヒマワリなども食べるとされています。

一方、関西地方においても、すでに 1997 年 10 月には大阪府枚方市と高槻市で採集されており、1998 年には京都府、滋賀県、大阪府、兵庫県、奈良県などあちこちで報告されていました。現在では富山県にも入り、西ではすでに山口県の下関



ブタクサハムシ成虫(小川誠氏撮影)

市や福岡県でも発見されています。

このような侵入昆虫が、関西と関東でほぼ同時に発見されていることをどのように考えるかは難しい問題です。成田空港と関西空港がある...そう簡単ではないでしょうね。

いずれにしてもこのハムシは、発見されてからその周辺地域へ、驚くほど早いスピードで分布を拡大しています。まだ四国に入っていないのであれば、その広がり方などが調べられるのではないかと考えていました。しかし、香川県三豊郡財田町において本種が発見されたことが報告され、すでに四国にも侵入していることがわかりました。

徳島県でも探そうと皆で話していましたが、香島の記録が発表された直後の 1999 年 9 月 11 日に、植物担当の小川誠主任学芸員が、美馬郡脇町周辺の植物調査を行った際に、ブタクサの葉が食害されているのを発見し、花穂や葉を持ち帰ってくれました。それには、幼虫数頭と 蛹 2 個がついており、飼育した結果、すべて成虫まで育ちました。成虫は特徴的な条紋をもち、容易にブタクサハムシと同定できました。これが徳島県内での初めての発見となり、その後、鳴門市撫養町、阿波町の土柱付近、美馬郡脇町や美馬町、那賀郡那賀川町などのブタクサで本種が発見されました。しかし、昨年の調査は、すべてブタクサを調査したもので、オナモミのように県下に広く分布している植物の調査を行っていません。小川さんの調べでは、兵庫県加古川市などではオナモミを普通に食べているということで、徳島県でもオナモミなどを含めた調査を行わないと、正確な分布状況は把握できないと感じました。

この侵入昆虫のハムシは、今後、徳島県や四国でどのように分布を広げていくのでしょうか。また、なぜこれほどのスピードで広がることができるのか。そして天敵はいないのか...など、おもしろい問題をかかえた種であると思われます。皆さんもお近くのブタクサやオナモミなどを探してみてください。それらの植物の花や葉を食べている小さなムシがいたら、ぜひご連絡を下さいますようお願いいたします。(動物担当:大原賢二)

## 企画展 藍のよそおい

日本人は、ぬのや糸を青く染める染料として、藍をながく利用してきました。その染め色は、濃淡や色あいによって「浅葱」「緑」「花色」「納戸」などと呼び分けられ、さまざまに衣服を飾りました。

四国の徳島は、古くから藍の産地として知られています。室町時代には生産がはじまり、江戸時代には阿波を代表する産物になり、現在もなお藍作りがつづいています。

この企画展では、江戸期の小袖などにおいて、藍がどのように用いられているかをさぐります。藍の奥深さと、魅力の一端にふれていただければと思います。

- 主催** 徳島県立博物館  
**会期** 4月18日(火)～5月21日(日)  
月曜日休館  
**会場** 県立博物館1階 企画展示室  
**観覧料** 一般200円、高校・大学生100円  
小・中学生50円  
(20名以上の団体は2割引)



図1 雲流水幕大太鼓文様帷子(東京国立博物館蔵)



図2 柳流水草花文様織箔(彦根城博物館蔵)

### 関連行事

#### (1) 記念講演会(無料)

「藍の歴史」

日時 5月7日(日) 13:30～15:00

会場 文化の森イベントホール

講師 長崎巖氏(東京国立博物館)

#### (2) 体験学習

「藍染をしよう」

日時 4月23日(日) 10:00～12:00

会場 松江市民会館・人形浄瑠璃居

講師 船井由美子氏(会場館嘱託学芸員)

#### (3) 部門展示(常設展観覧料必要)

「暮らしの中の藍染 - 収蔵コレクション -」

期間 4月1日(土)～5月28日(日)

#### (4) 展示解説(企画展観覧料必要)

日時 4月30日(日) 14:00～15:00

5月4日(木) 14:00～15:00

講師 大橋俊雄主任学芸員



## テンガイハタ —— 不思議な魚、紀伊水道に出現

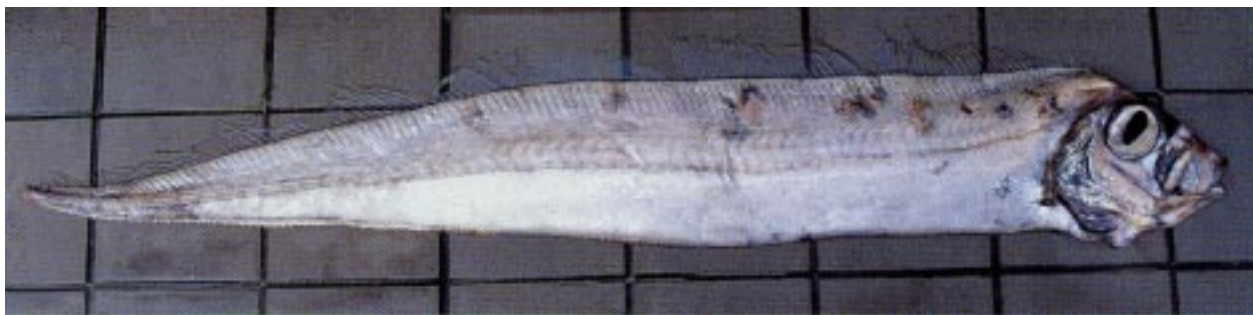


図1 テンガイハタ *Trachipterus trachipterus* (体長約204cm)

図1の魚は、徳島市漁業協同組合の数藤誠吾さんが、1999年9月の早朝に阿南市伊島沖の紀伊水道入りでタチ網(タチウオなどを採るための底引き網の一種)で漁獲したものです。初めて見る異様な形の魚だということで、博物館へ連絡し、寄贈していただきました。

この魚は、からだ全体が銀色で、細長く、尻鰭がないところはちょっとタチウオに似ていますが、フリソデウオ科のテンガイハタという珍しい深海魚です。ふだんは水深数100mにすんでいると考えられ、潮の流れの関係か、まれに表層まで上がってきて漁網に掛かったり、海岸に打ち上げられることがあります。地中海や南アフリカ、ニュージーランド、日本では千葉県以南から知られています。

写真のテンガイハタの各部の特徴を見てみましょう。まず、体長ですが、約204cmあります。ただし、尾部の先端がちぎれているので実際にはもう数cm長いでしょう。腹鰭はありませんが、これは成長にともなう退縮または脱落と考えられます。

体の表面に鱗はありません。ただし、細かなイボ状の突起がたくさんあり(図2)、とくに背鰭

の付け根付近と腹中線上では、大きくはつきりしています。からだの所々で皮膚が楕円形にはがれています。これは漁網によるスレでないことは明らかで、もしかすると大型のイカの吸盤が吸い付いた跡かもしれません。

胸鰭は身体のサイズの割には小さく、ほとんど水平に付いています。タチウオの胸鰭もそうですが、おそらく頭を上にして立った状態がふだんの姿勢なのでしょう。おもしろいのは背鰭で、付け根に沿った鰭膜に必ず小窓のような穴が空いています(図3)。長い背鰭を波打つように動かすことにより、漂うようにゆっくりと泳ぐと考えられますが、そのとき鰭膜の小穴が水の抵抗を減らすのに役立っているのかもしれません。

はまるで掃除機のように長くのばすことができます(図5)。を閉じた状態(図再)の頭長は27cmなのに対し、開くと39cmにもなります。タチウオのような大きな歯はありませんが、近づいてきたエビ類や小魚などを吸い込むようにして食べるのでしょう。

フリソデウオ科の魚はめったに採れないことから、研究が進んでいません。もし採れましたらご一報をお願いします。(動物担当:佐藤陽一)



図2 テンガイハタの皮膚 図3 テンガイハタの背鰭

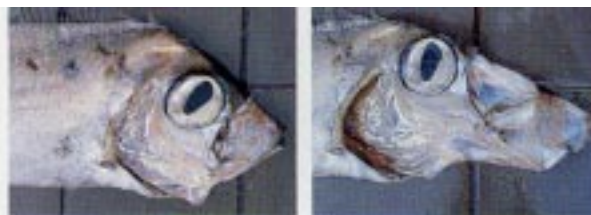


図4 テンガイハタの頭部 (口を閉じた状態) 図5 テンガイハタの頭部 (口を開いた状態)

# Q&A

## Q : この実のなまえはなんですか？

A

なんといつても質問の中でもっともおおいのは「この草はなんですか？」といったものです。ここに紹介するのもそういった質問のうちの一つ。

ある秋の昼すぎ、いつものようにレファレンスルームへ行ってみるとなにやら袋をもった方が来ておられます。早速お話をうかがってみると、何でも外国の知りあいからもらった木の实についてなまえが知りたいとのこと。外国の植物と聞いてちょっとたじろぎながらも期待してお話をうかがっていたところ、袋の中からでてきたのが図1の木の实。なんとも変なかたち！つぼのようでのあたりが飛び出して昔の釜のようでもあります。おまけにふた(図2、3)までついていてなんだか民芸品みたいじゃありませんか！何でもこれはブラジルのサンパウロ州のものだそうで庭にうえていたとのこと。さてさて、いったいこれはなんでしょう。そこで、ブラジルの植物について書かれた本を調べてみると...よくにたのがありました！サガリバナ科のレキティスのなかまのようです。ブラジルではクンプッカなどのなまえでよばれています

このなかまは中南米の熱帯に50種ほどがある木で、レキティスというよび名はギリシャ語で「あぶらつぼ」をいみするレキソスからきているというからなっとくです。

タネには脂肪がおおくて食べられます。人も食べますが、サルがこのタネ(図4、5)をととても好んで食べることから、ブラジルには「年をとったサルはクンプッカに手を入れない」(Macaco velho nao mete a mao em cumbuca.)ということわざがあるそうです。この意味は、わかいサルはクンプッカのつぼがたの实の中に手を入れておいしいタネを取ろうとする。しかしタネをに



図3 左がわはふたのついたもの。右がわはふたがとれたところ



図2 実のふたを内がわからうつしたもの

ぎると手がでないのであわてる。このことから「経験をつんだ人は失敗しない」といういみのことわざにつかうんだそうです。な-るほど！おもしろいこというなあ。

さて、質問のほうはこうやってこの実のなまえをお教えしました。実のほうは博物館に寄贈していただけることになり、今では博物館の大切な資料になりました。いつの日にか展示などで皆さんの目にふれることもあるかもしれませんね。

(植物担当:茨木靖)



図4 実の中に入っていたタネ



図5 実の中にタネが入っている



## 4月から6月までの博物館普及行事

あなたも参拝してみませんか？

シリーズ	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
野外自然 かんさつ	眉山の地質見学	4月9日(日)	13:00～16:00	小学校高学年以上(30名)
	春の植物かんさつ	4月23日(日)	13:00～15:00	小学生から一般(80名) 2
	磯のいきもの	5月21日(日)	12:00～14:00	小学生から一般(170名) 2
	磯のいきもの	6月4日(日)	12:00～14:00	小学生から一般(70名) 2
	川原の石ころしらべ	6月11日(日)	13:00～15:00	小学生から一般(40名) 2
	光に集まる昆虫かんさつ	6月17日(土)	19:00～21:00	小学生から一般(20名) 2
	災害と文化財保存	4月23日(土)	14:00～15:00	小学生から一般(50名) 1
土曜講座	ミノムシのはなし	5月13日(土)	14:00～15:00	小学生から一般(50名) 1
	花嫁行列 - 阿波の婚姻習俗から -	6月10日(土)	14:00～15:00	小学生から一般(50名) 1
移動講座	考古学から魏志倭人伝を読む	4月23日(日)	14:00～16:00	井川町ふるさと交流センター共催
	考古学から魏志倭人伝を読む	5月28日(日)	14:00～16:00	小学生から一般(200名) 1
	考古学から魏志倭人伝を読む	6月25日(日)	14:00～16:00	
歴史散歩	徳島城めぐり	4月16日(日)	10:00～14:00	小学校高学年以上(30名) 1
	古墳見学	5月14日(日)	9:00～17:00	徳島市・勝山町・美馬町(50名) 2
体験学習	藍染をしよう	4月23日(日)	10:00～12:00	松原歴史民俗資料館・人形舞臺資料館共催 小学生から一般(20名) 2
企画展関連行事	企画展展示解説	4月30日(日)	14:00～15:00	企画展「藍のよそおい」 観覧料必要(50名) 1
	帰化生物を探そう	4月30日(日)	13:00～16:00	小学生から一般(30名) 2
	企画展展示解説	5月4日(木)	14:00～15:00	企画展「藍のよそおい」 観覧料必要(50名) 1
	企画展記念講演会「藍の歴史」	5月7日(日)	13:30～15:00	企画展「藍のよそおい」 小学生から一般(300名) 1
	帰化生物を探そう	5月28日(日)	13:00-16:00	小学生から一般(30名) 2
講演研究会関連行事	記念講演会「水辺の再生をめざして」	6月3日(土)	13:00～15:00	小学生から一般(300名) 1

1は、申し込み不要です。その他は往復はがきでお申し込みください。(各行事の1ヶ月前から10日前までに届くように)

2は、小学生の場合保護者同伴。

くわしいことは博物館にお問い合わせ下さい。

\*\*\*\*\*

### 博物館資料を身近なものに

博物館では、学校などへ資料を貸し出し、学校教育の支援を行っています。今年度は、復元青銅器の銅鐸や火おこしに使うまいきり式の道具などを利用していただきました。貸出資料リストを新学期に配布いたしますので、くわしくはそれをご覧ください。

なお、資料の特別利用は無料ですが、資料の運搬は、学校が行ってください。

また、希望される場合は、担当学芸員と事前の打ち合わせが必要ですので、下記のお問い合わせ先までご連絡ください。

#### 《お問い合わせ先》

徳島県立博物館普及係

〒770-8070 徳島市八万町向寺山

TEL.088\_668\_3636 FAX.088\_668\_7197

### 博物館友の会に入会しよう

博物館友の会は、会員相互の教養の向上と親睦を図ることを目的として、史跡めぐりや野外自然観察などを行っています。現在会員数は、家族会員121組、個人会員98名、計546名です。ただ今平成12年度の会員を募集しています。あなたも入会しませんか。



子どもたちも大奮闘「七草がゆと草だんごづくり」